

氏 名 南出 和余

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1019 号

学位授与の日付 平成 19 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 「子ども域」の文化人類学的研究  
ーバンングラデシュ農村社会の子どもー

論文審査委員 主 査 教授 西尾 哲夫  
教授 杉本 良男  
助教授 野林 厚志  
教授 白田 雅之（東海大学）  
教授 押川 文子（京都大学）

## 論文内容の要旨

本研究は、バングラデシュ農村社会で暮らす子どもを対象に、子どもと社会の関わりを「子ども域」という新たな概念で捉え、その特徴を明らかにすることを目的とする。これまで「子ども」は、おとな社会からは切り離された一枚岩的存在か、あるいは社会に対して受身の存在としてしか捉えられてこなかった。それに対して本研究は、社会と子どもの接点を積極的に見出すことを目指す。そのために、子どもがいかに規範や価値を獲得しているかという子どもの視点と、当該社会のおとなが「子ども」という存在をどのように見ているかという子ども観を相互補完的に検証しながら、子どもたちの、他者との相互行為を通じた日常実践の動態を検討する。

第1章では先行研究のレビューを通じて「子ども域」への着目に到った経緯を追う。新たな概念を提示するにあたって、社会化の議論や「異文化としての子ども」の議論を概観し、「子ども域」はこれら従来の議論や概念では捉えられないものであることを示す。第2章では、子どもたちの日常生活世界を具体的かつ詳細に記述し、おとなの子どもへのまなざしと子どもの行為が出会う場に「子ども域」を見出す。結果、おとなによる子ども認識と子どもの生活時空には、子どもの役割や家庭での位置づけによって導かれる段階的な推移が見られた。また段階的推移とは別に、おとなたちは「子どもはブジナイ（分からない）から仕方がない」という認識によって、子どもに対しておとな社会の規範からの猶予を許す。子どもたちはこの「ブジナイ」として許される猶予領域のなかで、自らの判断や意向に基づいて社会との関わりを展開する。この領域が、本研究が注目する「子ども域」である。猶予領域としての「子ども域」は、ときにおとなからの働きかけや、そこで展開されるおとなと子どもの交渉によって徐々に規定され、その領域を狭めていく。子どもたち自身もまた、子ども同士の関係を築くなかで、おとな社会の規範を取り込みながら、自らの行動を規定する。続く3、4、5章では、「子ども域」がいかにして確保され、どのように規定されていくかを、具体的な場面から検証する。第3章では、子ども間の相互行為から彼らが自ら規範を作り上げていく過程を捉えるために、遊び集団に注目する。子どもたちの遊び集団には、その構成員と遊び内容から、4段階の集団形成を捉えることができる。子どもたちは、段階的な集団を形成しつつ、徐々に自らの属する集団をずらしていく。この絶えず流動的な集団形成とそのなかでの位置づけを通して、子どもたちは各集団のもつ行動規範を獲得し、それを自らの「ブジ（理解）」と認識する。その獲得の現場に作用しているのは、彼らの集団への帰属意識やポジショニングにある。その規範は同時に、当該社会のおとなの規範とも繋がっている。その理由は、「ブジナイ」から「ブジ」へという規範の繋がりと、規範を明確にもつ上位集団への（やがておとな社会へと通じる）段階的な移行の機能にあるものと考えられる。

第4章では逆に、おとなからの働きかけに「子ども域」を捉えるため、子どもの成長を文化的に規定する通過儀礼に着目する。男子割礼を事例に、割礼が子どもたちに何をもたらすかを検討する。その結果、割礼はムスリムとしての儀礼であるが、その実施においては、人びとの宗教的意義への意識は弱く、むしろ儀礼を通じてムスリム地域コミュニティの一員であることを示す意義の方が強い。また子どもに割礼がもたらされる経緯においては、親たちは子どもに、割礼や、あるいはコーラン学習や断食といった義務を強制しない。

子どもたちはやがて「できる／できない」の自覚をもち、できないことを「恥ずかしい」という概念でもって認識し、自ら段階的な規定を踏んでいく。つまり当該社会では、子どもの成長の文化的規定は、それをおこなわないという選択はないが、いつするか、できるかできないか、という決定には子どもの自主性に任される余地（子ども域）がある。それゆえ、割礼を受ける当事者の子どもたちは、割礼をただ受動的に受けるのではなく、彼らなりの意義を見出し、積極的に受け入れている。

第5章では、子どもの生活世界に新たに導入される学校教育に注目する。現在のバングラデシュには複数のタイプの小学校が存在し、子どもやその親たちはどの学校に通うかを選択する。なかでも注目したのは、各学校に対して子どもたち自身が意見をもっていることである。彼らは子ども同士の交流を通して他の学校の情報を得て、各学校を比較し、評価する。そしてときには彼らなりの理由によって、親の許可なく学校を転校することさえある。それに対して親たちは「子どもは分からないから仕方がない」といって放置する。この「分からないから仕方がない」というおとなから子どもへの「放ったらかしの自由」は、親たちが学校教育についての明確な認識や期待をもっていないことによって支えられている。つまり、新しく登場した学校は現代の子どもの空間に過ぎないという変容期ゆえに、おとなと子ども双方による学校選択が成り立ち、そこに「子ども域」が確保されている。今後、学校が子どもの生活に定着すると、「放ったらかし」の領域は失われ、子どもが各学校を評価するような「子ども域」の余地もなくなることが予想される。

以上本研究で明らかになったのは、社会のなかでおとなが子どもを「ブジナイ（分からない）」として規範を免除し放置する猶予領域でこそ、子どもは社会との関わりを積極的に展開しているということであり、その領域が本研究でいう「子ども域」である。それは、段階的に規定されていくなかで残された残余の領域であり、確固として確保される領域ではないために脆弱かつ可変的である。それゆえおとなの規範の影響も容易に受ける。そして、彼らが段階的に規範を獲得し、自らを規定していく現場に作用しているのは、おとなからの直接介入や宗教的意義の理解などではなく、子どもたちの集団性とそのなかでの「分かっている（ブジ）私」の認識である。おとなたちも、子どもを「ブジナイ」としながら、いずれは「ブジ」を得るであろうという了解のもとで、子どもに規範を強制しない。これらをまとめると、「子ども域」を可能にする要素には、①おとなからのあくまで放ったらかしの自由、②子どもの集団性の機能、③観察し得るおとな社会の近しさ、があり、それらが子どもの能動的な社会への関わりを導いているのである。

どのような社会でも、子どもは成長とともに徐々に関係や規範を内在化し、体現していく。その過程において、おとなのまなざしと子どもの能動的な行為がいかに出会うかを捉えることは重要である。「子ども域」の概念は、そうした社会（おとな）と子どもの関係性を捉えるための新たな視点を提示する。さらに本研究は、これまでのバングラデシュ地域研究を子どもの視点から捉え直す役割も担っている。すなわち、子ども期というエイジングの初期段階における、関係性のなかでの「ブジ」（規範の獲得）という側面を、本研究は明らかにし得たものと考えられる。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、バングラデシュの農村社会を対象とし、そこで暮らす子どもと社会のかかわりを論じた文化人類学的研究である。従来の研究では子どもは、大人から切り離された生活空間のなかで常に受動的に関わるものとして扱われてきたが、本論文においては、大人と子どもの相互行為によって成立する「子ども域」という新たな分析概念を導入することで、子ども文化における日常実践の動態を明らかにしようとする。その意味で本論文は理論的に極めて野心的な研究であり、当該社会の子どもをめぐる民族誌的記述の詳細さとあいまって、バングラデシュ研究あるいは南アジア地域研究に貢献するだけでなく、今後の子ども文化研究に対しても極めて重要な価値をもつ研究である。

本論文は6章から構成される。第1章では従来の子ども文化研究について文化人類学だけでなく社会学や心理学の方法とその問題点をレビューし、子ども文化を大人との相互交渉のなかで動態的に捉えていくための分析概念として「子ども域」を提唱する。第2章では「子ども域」が子どもをめぐる日常生活世界で文化的に認識されていることを示すために、子どもを総称する語彙の意味と社会的使用域および子どもの生活実態の分析を通して、大人と子どもが相互に干渉しあう「子ども域」を実体化させる日常実践として「ブジナイ（子どもはわからないから仕方がない）」という言語表現が重要であることを指摘する。続く第3章から第5章では「子ども域」が当該社会の具体的な文化現象のなかでどのように機能しているかを分析する。第3章では子ども間の相互行為から集団的規範が創出される過程を遊び集団の分析を通じて描き、その過程が第2章で析出した大人の子ども観による言語的認識と対応関係にあることを示す。第4章では大人から「子ども域」へ働きかける場面として男子の割礼儀礼を取り上げ、厳格な宗教儀礼と見られる割礼儀礼においても子ども側から能動的に実践する猶予領域があることを示す。第5章では、国家管理の下で新たに地域社会に導入されつつある学校教育の動向を分析し、子どもの自主的行動が容認される段階においては「子ども域」が機能していることを示す。最後に第6章では「子ども域」という分析概念の有効性の議論をもとに、地域研究としてバングラデシュ社会研究ならびに子ども文化研究全体への新たな可能性を提言する。

本論文は、子ども文化の民族誌研究としても高く評価されるべきものであり、また本研究に関連して制作された割礼儀礼の民族誌映画は国際的に高い評価を受け、第20回パルヌ国際ドキュメンタリー人類学映画祭で科学ドキュメンタリー最優秀賞を受賞した。「子ども域」という新たな分析概念についても、子ども側からの能動的な日常実践の重要性を指摘し、子どもと大人が全体的文化を継承していく動態的プロセスを明らかにしたという点において、重要な貢献をしている。

ただし本論文には問題点もある。「子ども域」という子どもと大人の相互作用の領域を記述するにあたって、著者は可能な限り身近で観察できる客観的事実とそれを補うインタビュー形式の情報収集をおこなっているが、当該の行為における子ども側の動機付けや理由表明が子どもの語りとして十分に吟味されているかどうか議論の余地が残るであろう。「子ども域」の設定が、特定社会の文化記述としては有効であるとしても、子どもの身体的成長や認知能力の発育という先天的で普遍的なパラメーターと、自然や社会という環境による後天的で文化依存的パラメーターがどのように「子ども域」の生成に関与しているかが

明らかにならない限り、記述枠組みとしての「子ども域」の有効性には限界があると思われる。本論文を先導的研究として新たな子ども研究の地平が開拓されることを期待したい。

このように今後の課題として問題点は指摘されるものの、本論文で提示されたデータは、質・量ともに貴重なものであり、高い学術的意義を有している。バングラデシュ社会をめぐる地域研究ならびに子ども文化研究一般について、今後のさらなる研究の展開を期待させるものであり、審査員全員一致して、学位の授与に価すると判断した。